

Ride on time

Vol.4

千西一週 特別特集号
2025年10月27日 発行
上田西高等学校新聞委員会編集局
編集局長：菊池ひとみ
新聞委員長：斎藤 瑠心

(C) 阪神タイガース

真価が問われるポストシーズン開幕

若虎の覚醒 は本物か。

阪神タイガース
高寺 望夢（2020年度卒）



阪神甲子園球場で内野の守備練習を行う高寺 写真撮影＝斎藤 慈生

いかと質問してみたが、本当にどこでもいいんです。試合に出ればなんでもいいと思っています。ただ、最近はお外野を守っているので外野の方が楽しく感じます。今まで守ったことがなかったのが楽しい」とコメント。「基本的にはどこの守備でもできますね。プロレベルでは厳しいですが、捕手も小学生と中学生で経験してきていますし、投手は高校でもやってましたし」と続けた。

ただ、浜風が吹く甲子園を本拠地にするタイガースにおいて本職ではない選手が外野を守ることは簡単ではない。高校時代野球部監督として高寺を2年間指導した原公彦野球部総監督は、このコンバートについて「チャンスをもたらたので良かったんじゃないかなと思います。内野手が外野で通用するのは簡単ではないですが、彼が外野でも対応できた理由は、打球への反応の速さが飛び抜けていたからだだと思います」と語った。

シーズンが進むにつれ、レフトを固定できないチーム事情もあり、守備範囲の広さや反応の速さを武器に外野での出場機会が増えていった。角度や距離感に戸惑いながらも、内野出身ならではの正確なスローイングで存在感を発揮。夏以降はスタメン起用に加え代走や守備固めでの起用も増え、持ち前の粘り強い打撃と堅実な守備でチーム創設90周年の節目の年の、セパ両リーグ史上最速優勝に貢献した。外野挑戦

がユーティリティプレイヤーという新しい可能性を示した形となった。そして迎えたセ・リーグクライマックスシリーズ、現在行われている日本シリーズでは内野手登録でベンチ入り。競争を勝ち抜き大舞台への切符を掴んだ。

原総監督は高校時代の高寺について、「陽キャではなく寡黙に練習に取り組む姿が印象的だった。1年の4月の1試合目から試合に出させて背番号も1桁をあげたので、技術的には高いものを持っていたのと、自己主張をしないから先輩たちとも対立せず上手く関係を築いていた。昔から努力を実直に続けるタイプ」と振り返った。

高寺が入団した2020年度はファンからは「神ドラフト」と呼ばれており指名された選手の多くが主力として活躍している。唯一の高校生として入団した高寺だが同期入団の選手達について「先輩達がすごいので必死についていこうとしています。みんな本当に優しいんですよ。最近の野手の人たちと関わりが多いので、佐藤輝明選手、中野拓夢選手とはたまに話しますが、そんなに野球の話はしないですね」とチーム内でのコミュニケーションについて話した。

これまで2軍でひたむき努力を続けてきた高寺が、新たなポジションで輝きを放った今シーズン。高校時代から変わらぬ誠実さと向上心が、今を支えている。

(斎藤 慈生)

8月30日の試合で話題になった「お子ちゃま事件」。バントの失敗で小フライを打ち上げた際に一塁まで全力で走らずその後ベンチ後方に引っ込んでしまった高寺に対し、藤川監督が「お子ちゃまレベルの選手がいる」と酷評。悪い意味で注目を集めた出来事だった。

高寺は「あれは僕のミスなんですそれは言われて当然って感じですね」と話した。なぜ走らなかったのか？という質問には「走りたくなかったわけじゃないんですよ。野球やってる人ならわかると思うんですけど、あ、バントでフライ上げちゃった」って思った瞬間って体が止まってしまっんです。やってしまったって気持ちに先に打ちやいました」と説明。野球人ならではの「焦りの一瞬」を素直に語ってくれた。

監督からも厳しい言葉があったが、それも「本気で成長してほしい」という期待の裏返しだろう。プロの世界では小さな判断の差が結果を左右する。その厳しさが、この出来事が大きく取り上げられる理由の一つになった。

「次はあんなにないように」。そう前を向いて話す高寺の姿は、失敗を乗り越えようとする強さを感じさせた。ひとつのミスを糧に、また一歩成長した彼の姿をファンは期待している。「凡事徹底」を掲げる藤川監督にとって当たり前のことを当たり前にできる選手の価値は高いはずだ。

(斎藤 慈生)



外野挑戦で見えた可能性

ユーティリティ性アピールし存在感アップ

浜風吹く阪神甲子園球場の外野守備練習で、フェンス際の打球を好捕する高寺 写真撮影＝斎藤 慈生

プロ野球阪神タイガースに所属する本校卒業生の高寺望夢選手（20卒・上田市立真田中出身）が、現在プロ野球日本一を決める日本シリーズに出場中だ。プロ5年目、大きな飛躍を果たし覚醒しつつある。編集局ではタイガースの本拠地甲子園に赴き、今シーズンを振り返ってもらいながら日本シリーズへの意気込みなどについて取材を行った。

外野挑戦でブレイク

今年の春季キャンプでMVPに選ばれた高寺。藤川球児新監督のもとで迎えたキャンプは、まさに勝負のスタートだった。「監督が変わって、必死にやっていたんで、そういう部分を評価していただいたのかなと思います。本当に一日一日、必死にやっていた」と振り返る。

そのキャンプの中で新たな挑戦が始まった。内野手の高寺が、突如外野の守備練習を開始。「ふとその日に外野の練習に入って、そこからスタートした感じです。コーチからの指示でした」と語る。突然のコンバートだったが、「めっちゃめっちゃ楽しかった。今となってはレフトが一番慣れているし、外野が好きです」と笑顔で話した。

ただ、高校時代を含め、ここまで内野手として活躍してきた高寺。ぶっちゃけ本心では内野を守りたいのではない



笑顔で取材に応じる高寺 写真撮影＝斎藤 瑠心、阪神甲子園球場

「持っている男」日本シリーズでの活躍なるか

プロ野球選手である以上、高いパフォーマンスを維持するためには強靱なメンタルが求められる。高寺は今季多くの時間を1軍で過ごしたが、一時期登録を外れた時期もあった。「1軍登録抹消は」そんなに落ち込まなかった。また戻るように頑張りたいと思った」と当時を振り返った。では気持ちが悪く落ち込んだ時にはどう対処しているのだろうか。これについては「自分の趣味を大事にしています。僕はYouTube見て寝ればだいたいのは忘れられます」と高寺。心の切り替えが早く、負の感情を翌日に持ち込むことはない。エゴサーチも一切せず情報収集は「Zenn」ニュースを見るくらいだという。外からの声に左右されず、自分のやるべきことにフォーカスする。そんな日々の行動が幸運を引き寄せているのではない。いか。節目やチームの窮地で輝く高寺は「持っている男」といえる。

本人は「持っている男と言われたのは初めて」と話す。プロ入りのきっかけとなったプロ志望の高校生による合同練習会は、コロナ禍で甲子園がなかったため開催された。球団創設90周年の節目で両リーグ史上最速優勝を果たした9月7日の試合ではスタメン起用され決勝打点となる犠飛を放つと、試合後のセレモニーでは「スタメンで持つ」と渡されたセ・リーグのペナントを持って甲子園球場を一周した。また、5月には9回2死から起始回生の同点弾となるプロ初ホームランを放った。会場のハードオフエコスタジアム新潟は、高校時代勝てば選抜甲子園出場が有力視された試合で痛恨の逆転負けを喫した因縁の球場だった。

1投手ら世界最高峰の投手とも対戦するなど「経験も積んだ」。「打って守って走るといふのを全部頑張りたい。走・攻・守のどこか一つが欠けたら自分が存在している意味がない。全部をしつかりやらないとダメなんです」と口にした高寺。今季残すタイトルは日本一のみ。ここまで日本シリーズ2試合では打力を買われ、1軍プロデビューの思い出が残るみずほベイビードームでスタメン起用された。公式戦初のDHでの起用で1安打を放った高寺は「ビジターでしたが半分くらい阪神ファンだったのでビジター感なく楽しんでできました。昨日のヒットをいい機会に次はチャンスで打ちます」と甲子園での活躍を誓う。

大阪出身 井上先生、タイガース愛を語る

物心ついた頃からタイガースファンだという大阪出身で理科の井上美明子先生に話を聞いた。「大阪で生まれたらタイガースファンでしょ」という空気が大阪にはあるという。井上先生にとってタイガースの魅力とは勝敗や強さではなく「球団そのもの」に向けられた愛情だ。「勝っても負けても関係な

い」という言葉はタイガースへの愛が詰まっている。タイガースファンであり続ける理由を尋ねると、「大阪人としてのアイデンティティ」と即答した。「大阪といえば阪神。阪神といえば大阪。大阪から見ても、外から見てもそういう感覚がある」と話す。

単なる趣味ではなく、自らが大阪の人間であることの表明でもあるという。タイガースの試合が本拠地の甲子園で行われると応援にも一層熱が入る。とても広く異世界を感じさせる甲子園の空気感はタイガースファンにしか生み出せないもの。「タイガースという球団を核にして周りが盛り上がりがあるという雰囲気

が他の球団よりある」と語った。高寺については、「当時は真面目に授業を受けていた。自分の勤務先からタイガースの選手が出てきてとても嬉しい。高寺は、ドラフト指名時にタイガースの応援歌である六甲おろしの歌詞を知らないと言っていたので覚えなさいと言ったのですが覚えてくれたかな」と話した。